

佐藤宏子先生のご退任にあたって

篠 目 清 美

佐藤宏子先生のご退職、それはこの春、現実のものとなった。3月下旬のある日、いつものように3号館の階段を上っていくと、先生の研究室のドアが開いている。絨毯の張りかえ作業なのか、お部屋は空っぽだった。そのとき覚えた言い様のない淋しさと心細さ。私は茫然と立ちつくした。

佐藤先生は1956年に東京女子大学をご卒業後、東京大学大学院に進まれ、1958年に修士号を取得。さらにマウント・ホリヨーク大学大学院に留学され、1960年6月にM.A.を取得し、9月に本学英米文学科の助手に着任された。その後、専任講師、助教授を経て、1975年教授に就任され、本年3月のご退職に至るまで、41年7ヶ月の長きにわたり本学の教育に心血を注がれた。先生のようなエリート中のエリートは、時に学生にとって近寄りがたいものであるが、数多くの学生が佐藤先生の魅力に引きつけられた。学問的には厳しい先生のまわりに、つねに華やかな学生の輪が広がっていたのは、学生は未熟ながら、本能的に本物と偽物を見極めたからであろう。

佐藤先生への漠然とした憧れは、こちらが少しずつ経験を重ねていくにつれ、確固たる尊敬の念へと変わっていった。まだ専攻学科の決定していない1年生必修の「英文法・英作文」をご担当の佐藤先生が、アメリカ文学研究者として国際的に活躍されている凄い先生らしい、と私たち1年生も気づいていた。ある時、アメリカの学会から前日帰国される予定が、飛行機が遅れ、先生は空港から大学に直行され、お疲れも見せず、いつも通りのパワフルなお授業。私たち学生は度肝を抜かれた。空港は羽田だったけれど、もし成田であったとしても、先生は駆けつけたことだろう。チーチーパッパの1年生の授業でも決しておろそかにしない先生の情熱は、私たち学生の心を打った。

その後、佐藤先生がウィラ・キャザー研究の第一人者であること、黒人女性作家に関するご著書などが高い評価を受けていることなど先輩からお聞きした。そして先生の女性作家のゼミに参加した際、2年前(1973年)のアメリカでの学会がキャザー生誕百年の国際シンポジウムで、現役作家ユードラ・ウェルティ、キャザー研究の大御所レオン・エデルとともに佐藤先生も発表者のお一人であったことを知り、大変誇らしく思った。あとで伺ったところ、女性作家研究の草分け的存在エレン・モアズも同席していたとのことである。錚々たるメンバーによるシンポジウムだったのだ。

1970年代のアメリカ文学界は、フェミニズム運動の台頭により、過去の女性作家の再評価が活発になりはじめた頃である。とはいえ、現在のようにインターネットで簡

単に、安価で洋書が手に入る時代ではなかった。佐藤先生は海外から取り寄せた貴重で高価な資料を惜し気もなくプリントして配ってくださった。私たち学生は消化不良ながらも、そうした御馳走を必死に詰め込んだ。それがいかに恵まれた体験であったかはっきり認識したのは留学してからである。アメリカの大学院で受講した女性作家に関する授業のリーディング・リストには、既に佐藤先生のお授業で読んだ作品が並んでいた。またアメリカ人学生にとって「最新情報」が、私にとっては「最新」でも何でもないことに驚かされた。おそらく私以上にびっくりしたのはクラスメイトであっただろう。ディスカッションにはつねに出遅れる日本人留学生が、「それ日本の大学で読んだわ」と言うのだから。

先生のお書きになったものについて限られた紙面で語ることは不可能なので、2点のみご紹介させていただく。まず『アメリカの家庭小説』（研究社、1987年）。19世紀女性作家研究のバイブルとも言うべきご著書である。そして1991年4月から1992年12月にかけて『英語青年』に連載された「アメリカン・ガールの形成」である。今でこそ「キャンソンの見直し」と称して、アメリカ文学研究も従来の白人男性作家中心主義から脱却しつつあるが、父権制社会において「他者」である女性（作家）の視点からアメリカ文学を捉えなおすことは、先生が一貫して追求してこられたテーマである。やっと時代が先生に追いついたといった感がある。

先生は学生部長、外国語科目主任、学部長補佐、評議員と数々の役職をこなされたが、なかでも特筆すべきは、6年にわたり女性学研究所長をお務めになったことである。先生のご尽力により、海外の研究者との交流も一段と活発になった。

また数ある学外のお仕事として忘れてならないのは、1998年から2000年にかけてアメリカ学会の会長という重責を担われたことである。女性会長としては故久保田きぬ子先生に次いでおふたりめであるが、学会が現在のように若手研究者も参加できる大きな組織となってからは初めての女性会長である。また当学会がアメリカの会長をはじめ、海外の研究者を招聘しての名実ともに国際的な学会に発展したのは、常務理事としての先生のお働きがあつてのことと、関係者の方々に伺っている。

最後に、現在先生が取り組んでいらっしゃる、そして私たち後輩が楽しみにしている企画についてご紹介したい。アジア人学生のためのアメリカ文学のアンソロジーの執筆・編集に先生は携わっておられるのである。アメリカ文学研究者はどうしても本国アメリカのみに目を向けがちである。そしてグローバリゼーション・イコール・アメリカナイゼーションに陥る嫌いがある昨今、アジア人としての視点から編纂されるアンソロジーは、まさに先生の生き方を体現したものと言えよう。

冒頭、先生ご退職にあたって情けない泣き言を並べてしまったが、こうしたお仕事を通して、これからも先生は私たち後輩の道しるべでいてくださることは心強い。専任職を退かれてもまだまだお暇な身とはならない先生と、いずれゆっくり文学談義のみならずおしゃれ談義を楽しみたいと願うきょうこの頃である。